

地域の底力——埼玉県秩父郡横瀬町

多彩なチャレンジが 扉を開く

よこぜまち
埼玉県横瀬町

「日本一チャレンジする町」。
埼玉県横瀬町は豊かな自然と
都会に近い環境を活かしながら、
数多くの挑戦を受け入れて
人のつながりを紡ぎ続ける。

秩父盆地の象徴である標高約1300メートルの武甲山のふもとに横瀬町がある。日本有数の上質な石灰石の鉱床があり、山肌には採掘の跡が見られ、周辺にはセメント関連の工場が点在する。初心者が楽しめるトレッキングルートとしても、武甲山は人気の的。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

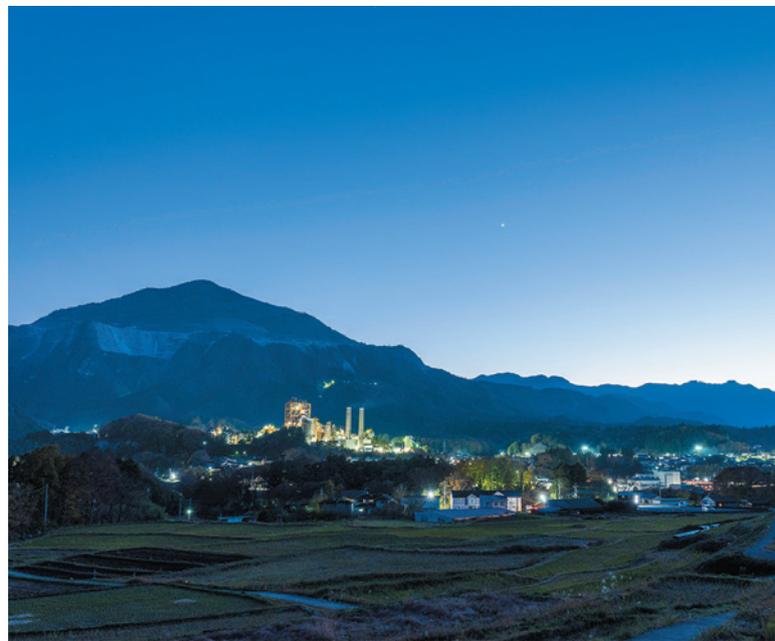


「公務員には保守的でチャレンジしにくいイメージがありますが、町のために何とかしたいとの思いを役場職員が持つことで、地域は変わると思います」と話す、横瀬町長の富田能成氏。町役場の入り口には絵本も並ぶ優しい空間が広がる。地元の工房が設計から手がけた。

志ある人を引きつける チャレンジする町

埼玉県秩父郡横瀬町は県西部の中核である秩父市の南東に隣接しており、人口約七六〇〇人を有する。西武秩父線の特急を利用すれば池袋駅から八〇分足らずと、都内にもアクセスしやすい。町役場に近い横瀬駅を降りると、住宅や田畑の向こうに、武甲山をはじめ山々の景観が広がる。山肌には遠くからも確認できる石灰石採掘の跡が、戦後の経済成長を支えたこの町の成り立ちを語る。

金融機関勤務の後、二〇一五年



暮れゆく空と武甲山。セメント工場の明かりが浮かびあがる。

から現職を務める町長の富田能成氏は、横瀬町には三つの恵まれた条件があると話す。

「豊かな自然環境、祭りの文化が色濃く残るコミュニティの強い力、そして東京からの程よい距離感。この三拍子がそろう地域はそれほど多くない。日本一の町を目指そうと、就任後、最初に職員に話しました。横瀬は小さい町ですが、小さな挑戦を阻むしがらみはありません。住民の皆さんの顔が見えるという小さい町ゆえのメリットもあります」

あらたな道を切り開くため、二〇一六年にスタートさせた取り組みが官民連携プラットフォームの「横瀬町とコラボする研究所」、略して「よこらぼ」だ。まちづくりの実践や実証実験などができるチャレンジのためのフィールドだと富田氏は話す。

「資源が限られた小さい町の未来を変えるには、ヒト、モノ、カネ、情報を外から呼び込む必要があります。よこらぼはそのための仕組みです。町の課題を直接解決するチャレンジでなくとも、社会

や町の将来に役立つ可能性があるものなら幅広くお手伝いします」と、思い切り間口を広げました

二〇二三年までの七年間で二三四件の提案があり、一四一件が採択された。名前の知られた大手企業から個人や大学生のサークルまで提案者はさまざまで、教育や健康、空き家対策、マーケティングなどジャンルも多岐にわたる。

「官民連携はどうしても民に比べると官の対応が遅れがち。よこらぼは民間のスピード感覚に追いつくために、毎月審査を受け付け、最短一カ月で採否を決定しています。町の予算を使用しない案



上/Area898は商店街の代わりに、世代を超えて町の人々が集うことを願って作られたコミュニティスペース。「898」の名称は「やくば」の語呂合わせ。下/Area898の一つ上の階にあるArea899は、親子や子どもたちが安心して過ごせる社会に開かれた場所。木の温もりを感じる空間づくりを担ったのは同フロアにある工房「TATE Lab. (たてラボ)」。



件が多いため、提案を採択できるスピード感がよこらほの強みです。町がお金を使わない分、現場の職員は提案者に徹底的に寄り添って、国や県の補助金申請や、町の人とのつながりをサポートしていく。大変ですが職員のやる気があるから継続できている事業です。役場は職員一〇〇名足らずの規模ですから、未来を変えたいという私の意志を直接しっかりと伝えていきます」

よこらほが耳目を集める中、町は「日本一チャレンジする町」をコンセプトとして掲げた。「変化のスピードが速い今の時

代、確実な成功を予測することは難しい。ですから、トライアルを増やすことが大切です。よこらほではチャレンジを応援する仕組みが機能し続け、ありがたいことに、提案の質、量ともに上がっています。また、チャレンジという言葉には人を引きつける力もあり、よこらほを介して多くの人がこの町に関わるようになってきました」

多様な関係人口が増える一方で富田氏が積極的に進めるのは、商店街のない横瀬の中心地づくりだ。その要となるのは、二〇一九年に農協の旧直販所の跡に完成した「Area898」だ。

「横瀬には駅前に人が集まる商店街がありません。それに代わる人が交流する場を設けたかったんです。Area898は、誰もが利用できるコミュニティスペースですが、町の人がよこらほに提案する形でスタートしました。住民の皆さんや町外の来訪者のそれぞれが気軽に立ち寄れるスペースです。放課後は小中学生が宿題やゲームをする姿が見られ、建物内には親子で利用できるエリアもあり

どぶろく製造のプロジェクトを牽引してきた武藤量司氏は、横瀬町観光協会と連携しながら、農作業から始まるどぶろく造りの体験プログラムも進めているという。



ます。小さな人の輪が少しずつ増えており、多様な人々への理解を深めてほしいとも思っています」

行政の後押しがあらたな取り組みの扉を開く

よこらほは外の人を呼び寄せるだけではなく、町の人がチャレンジする背中も押す。その一つが、三〇年ほど前にそば好きが集まって発足した「横瀬そば会」のどぶろく造りだ。役場勤めの後、そば会の会計担当を務める武藤量司氏は振り返る。

花咲山のラベルは、新しい購買層を狙って華やかなデザインを採用。



「遊休農地を活用して会員二五名がそばの栽培から手がけ、直営店やイベントなどで「ひきたて打ちたて茹でたて（三たて）」のそばをふるまってきました。会員が皆、酒好きということもあり、そばを待つ間に飲んでいただける



横瀬そば会のメンバーも含めたボランティアが、10年ほどかけて整備してきた花咲山公園。数千株の花樹が植えられ、地元の人の憩う場として定着した現在も、作業が続けられている。

どぶろく造りをと願っていましたが、酒税法の関係もありハードルが高く実現できていませんでした。二〇一七年によこらぼへの提案が採択され、行政を動かす形で、横瀬町のどぶろく特区認定にこぎつけました」

その後も、仕込みに関してはゼロからのスタートで、容易な道のりではなかったと語る。どぶろく造りの先達である新潟県の職人に指南を受けるなど、武藤氏は周囲の協力を得て準備を進め、二〇一九年に初の仕込みによる「花咲山」が誕生した。名称は、

会員等がボランティアで山の斜面の草木を伐採し、花木を植えて作った花咲山公園にちなむ。

「祭りやイベントへの参加、土産物店や酒販店での販売により認知度は上がり、出荷数はじわじわ伸びています。二〇二三年には全国区のだぶろくコンテストで入賞することができ、県外から注文が入るまでになりました」

そば同様のだぶろくの原料となる米もまた、会員が自ら栽培する。どぶろくの出来上がりをみながら、毎年栽培する米の品種を変えるなど味わいの追求も続く。「まだまだ試してみたいことは、たくさんあります。やる気があれば、チャンスがあるのが横瀬。どぶろくに漬けた豚肉やどぶろくを加えたパンは、やわらかく、味わい深くなるのが分かっていますから、きつと需要があります。地域と連携しながら新商品を開発していきたいですね」

武藤氏を含めた多くが七〇歳以上と高齢化が進むが、前向きに楽しみながら地域の活動に取り組む。若い世代にも積極的に参加してほしいというのが武藤氏の願いだ。



自然に触れ合う
教育の豊かさ
小さなつながりが
次の挑戦につながる

子どもたちを広く受け入れる小さな輪の一つ、二〇二一年に開校したフリースクール「N.A.Z.E.L.A.B」も、よこらぼから生まれた。親子で参加できる屋外調理イベントも行われ、町の人々が集う場にもなっている。

運営する「タテノイト」の館野繁彦氏、春香氏は、ともに地球惑星科学の研究者。自然環境を活かした教育を目的に、茨城県から春香氏の故郷である横瀬町に移住を



右/タテノイトの館野繁彦氏と春香氏。「地方の豊かな自然の中で教育をやりたいかった。横瀬は、僕たちの専門である地質学、石ころが身近にある場所でした」

左/認可外保育施設「森のようちえん」。春香氏の実家の機械工場をリノベーションした建物。生い茂っていた草を自分たちで刈るなど、子どもが過ごしやすい環境を整えた。

決めた。

「地球はどうやってできたかを研究するのが、地球惑星科学です。いわゆる象牙の塔にいたため社会と接点がありませんでしたが、娘の誕生後にこの社会の未来を考えるようになったのが転身



上／家庭と学校以外の「第三の学びの場」を提供するNAZELAB。夫妻が紡いできた縁により専門的な機器や、科学、文化、歴史など多数の書籍がそろる。

下／秩父地方の自然の中で地球の成り立ちに触れる「ちっぼけツアー」は、親子で参加できる。



(写真提供:下/タテノイト)

のきっかけでした」と語る繁彦氏に、春香氏が続ける。

「一時期、都市部を離れて川や海が身近な鳥取県の田舎町で過ごしたことがあり、娘が河原や砂浜を走る姿を見て、すてきな環境だと思いました。私自身が開放された気分だったのも、今につながっています」

自然の中での教育を目指した夫妻がNAZELABに先駆け、二〇二〇年に横瀬で立ち上げたのが保育施設「森のようちえん」だ。プログラムや遊具はなく、一日の活動を園児が決め、四季の変遷を感じる自然環境に触れながら過ごすのが特徴だが、何もなくても子どもたちはいろいろなものを生み出すという。

地球惑星科学について大学レベルの内容を子ども向けにアレンジした授業と併せ、自然の中で学ぶ「ちっぼけツアー」も開催。地球の一部にすぎない人類がいかにちっぼけな存在なのかということを感じてほしい、との思いがネーミングに込められている。

「この町には新しいことを受け入れる土壌があるうえ、小規模なので人がおのずとつながります。横瀬町に移住した当初から町長や役場をはじめとした人の輪が広がり、僕たちの活動を応援してもらっていました」

そのつながりはやがて、よこらほへのNAZELABの提案、採択につながり、土地探しから助成金の申請手続きまで行政がサポートした。

高校進学にあたり故郷を離れた春香氏は、横瀬町に戻りあらためて暮らしやすさを実感しているという。

「思春期の頃は何もなかったこの町から早く出たいと思っていましたが、自然のありがたさにも気づいていませんでした。今では気兼ねのいらぬ子育て環境が心地よい

し、近所のお年寄りが、子どもをかわいがってくれるのも嬉しいことです」

チャレンジが広がる横瀬町を、繁彦氏がこのように例えたのが印象深い。

「多様なリソースがあるうえ、いろいろな得意分野を持つ人がいて面白いですね。まるで水滸伝（みづかたでん）に出てくる梁山泊（りやうざんぼく）のようです」

二拠点生活で広がる 小さな思い付きを 実現できる町

山の近い横瀬では、有害鳥獣対策や、減少する狩猟の後継者確保が大きな地域課題になっている。「カリラボ」は、これらの課題解

決を目指して、二〇一九年に設立された。よこらぼが背中を押すことで形となった事業だ。多数の猟師がわなを共有する「ワナシア」

「本格的な狩りのノウハウを学ぶ「カリナビ」、狩猟に関する情報やサービスを提供する「ハンターズクラブ」、さらには体験型の「狩猟&解体イベント」を柱としてスタートしたと話すのは、代表の吉田隼介（しゅんすけ）氏だ。

「鉄砲所持の許可申請をはじめ狩猟の世界はハードルが高く、まずは興味がある人に足を踏み入れ

上／「ジビエや狩猟にはポテンシャルがあるのではないかと、これまでの活動を通して僕自身は思っています」と話す、カリラボ代表の吉田隼介氏。

下／吉田氏が横瀬町と縁をつなぐきっかけとなった山のコテージ。木々に囲まれた自然豊かな環境にあり、狩猟の拠点として体験イベントにも使われている。





上/カリラボが運営する横瀬ジビエ製造場に併設されたレストランには、旬のジビエを目当てに人が集まる。県外のシェフが秩父の鹿肉に魅了されて腕を振るいに訪れることも。

下/鹿の解体風景。



(写真提供: 下/合同会社 浅見制作所 浅見 裕)

てほしいとの思いがありました。子どもの食育の場として狩猟&解体イベントに参加される方がいたり、地域課題に関心を持つ方がいたり、思っていた以上に興味の入り口は多彩です」

吉田氏の本職は東京のIT系企業の社員であり、かつては都内の自宅から関東近県へと趣味の狩猟に出かけていたという。

「横瀬との縁ができたのは、週末を過ごす拠点を探す中で気に入った物件を見つけたのが最初です。狩猟のためでもなかったのですが、地元の猟師さんとたまたまご縁ができました。交流の中で、

都会の猟師が近隣の猟場を訪れる不便さや、鳥獣被害が少なくないという地元の課題などに話が広がり、何かやってみたいと考え始めたんです。そのタイミングでよこらぼってというのがあるよと紹介されました。とんとん拍子で提案、採択されて、カリラボの起業に至りました」

カリラボ設立後も、都内での会社勤めを続けているため、車で約二時間の距離を行き来する二拠点生活を継続。滞在時間は都内の方が長いものの、気持ちは横瀬にあると吉田氏は語る。

カリラボ設立当初からジビエによる観光振興を目指していたこともあり、二〇二三年には解体場に併設してレストランをオープンさせた。遠来の客も多く、評判は上々という。ソーセージやパスタソースなど、鹿肉の加工品の製造、販売も手がけるようになった。

「レストラン開業の際には、物件探しから工事関係の紹介まで、役場の人たちが仲間のように入手伝ってくれてスムーズに進みました。よこらぼの採択はいわば町のお墨つきですから、地域の人にも

活動を理解してもらいやすいという利点があります」

よこらぼは補助金を受けられる制度ではないが、そこが重要なポイントだと吉田氏は語る。

「事業のための資金が必要だという人は横瀬には来ません。むしろ金銭が絡まないからこそ、土気の高い健全な活動が生まれていると思っっています。加えて外の人を柔軟に受け入れる雰囲気もあるうえ、人がつながる田舎の長所が活かされていますね。しばらくは東京での仕事を続け、余裕のあるスタンスで二拠点生活をキープしていくつもりです。それにしても、初めて横瀬に来た時には、数年後にこんなチャレンジをしているとは予想もしていませんでした」

あらたな潮流を生む 地域おこし協力隊

よこらぼとは異なる方向から町の活性化に貢献するのは、二〇一七年から受け入れを開始した「地域おこし協力隊」だ。隊員数は二三人と、首都圏一都三県で

は最多。最長三年の任期後も横瀬の周辺に残る人は多く、これまで家族を含めて約四〇人が移住している。その一人、千葉県出身の吉村俊也氏は二〇二四年春に大学を卒業したばかり。学生時代、教授の視察に同行して訪れるうちに、町に関心を持ったという。

地域おこし協力隊として県外から横瀬に移住した吉村俊也氏。「自分で栽培したブドウが、ビールとして生まれ変わったのは感慨深かったですね」と喜びを語った。





上/ENgAWAが運営する「チャレンジキッチン」では、週末のカフェの運営、シェアキッチン、地域と連携したイベントの開催など幅広い活動が行われている。
下/横瀬駅前の駅前食堂は、町を訪れた観光客だけでなく地域住民の利用も多い。



「もともと起業したいという気持ちにはあり、よこらばでチャレンジを考えると考えていたのですが、地域をもっとよく知ってからと考え、横瀬の地域おこし協力隊に加わりました」

隊員は互いに協力しながらも、自分が力を注ぐ領域は自分で決める。名刺の肩書は自分のなりたいたい姿を書くことになっていくという。吉村氏の肩書はひらがなの「うぎよう部長」だ。

「横瀬町は兼業農家がほとんどで、高齢化や後継者不足で遊休農地や耕作放棄地が増えています。今はその再活用を一番に考えており、例えば外の人に畑を使ってもらう流れが生まれれば、ビジネスになるかもしれない。東京から近

いので、休日に横瀬で農業をということもできるのではないかと思っています。農業は初心者ですが農家さんから学び、実際に作業にも従事します。若い人たちが一緒にやってくれるのが嬉しいとの声を聞くと励みになります」

「地元の消防団にも入りました。通っていた頃から居心地の良さは感じていたのですが、実際に暮らしてみても多くの方々と出会い、温かい町だなとあらためて実感しています」

一年目は、高齢の農家から土地を借りてブドウを栽培。吉村氏が農家の孫世代にあたることから命名された「まごぶどう」

「ENは御縁の縁、応援の援、お金の円、WAは循環の輪を意味します。ENgAWAでは、農業、新商品の開発やイベント開催の場にもなるカフェ、特産品の販売や観光案内、地元関連メニューの開発を担う駅前食堂といった複数の施設を運営するなど、幅広い活動を協力隊のメンバーが担っています。ただし、現実問題として、一つ一つの事業には採算面の課題があります。例えば、先述のまごぶどうも単体で見ると黒字化は容易ではありません。しかし、ENgAWAの駅前食堂やカリラボのレストランとつないでいくと

は、秩父市の醸造所への提案が通り、ブドウを使ったビールとして二〇二四年秋に販売された。カリラボの吉田氏も「いずれレストランで提供できれば」と期待する。

の仲間ノウハウや町内のリソースを活かすことで、地域の活動として成り立たせていくことができないかと考えています。活動に興味を持つ

吉村氏をはじめ、横瀬の地域おこし協力隊の多くが地域商社と言われる「株式会社ENgAWA」の社員として働いている。町役場

の仲間ノウハウや町内のリソースを活かすことで、地域の活動として成り立たせていくことができないかと考えています。活動に興味を持つ



つ企業も少なくありません」 拡大する連携の数々が 町の未来を照らす

町長の富田氏は、地域おこし協力隊についてこう語る。

「人手不足が深刻な時代、町に思い入れを持ってくれる人が増えるのはありがたいと、全力でサポートしています。ENgAWAは、高齢化した農家さんを勇気づける存在になっているのが嬉しいですね。一方で経済の循環づくりはまだ順調とはいえず、将来的には民間企業やシニアの方々にも関わってもらいたいですね」

水道やごみ処理をはじめスケー

「ENgAWAという名称には人々の『縁』が輪になってほしいという気持ちを込めました。そして最終的には地域経済を意味する『円』が輪になる将来にも期待しています」と語る、町役場まち経営課の田端将伸氏。



2015年公開のアニメ映画「心が叫びたがってるんだ。」では横瀬駅や大慈寺をはじめ横瀬の景色が多数登場する。劇中の架空の停留所も設置され、「聖地」として作品のファンが巡り歩く。

ルメリットが必要な公共サービスは、横瀬町が参加する秩父広域市町村圏組合が行う。このため、横瀬のように小さな町でも、自分たちの独自のまちづくりに「全振り」できる。

「住民の理解が得やすい、一体感がつくりやすいなど、先進的な取り組みは小さな自治体の方が柔軟に対応しやすい。同規模の自治体とつながることで、地方自治体の運営における新しい価値をつく

れないかと考えています。志を同じくする、他県の小規模自治体、例えば福島県磐梯町や鳥根県海士町、鳥取県北栄町とも手を取り合っています。また、多様なプロジェクトや連携、人間関係が広がっていく中で重きを置くのが、ウエルビーイングな暮らしです。町では『多様なその人らしい幸せ』と定義しています。持続可能な地域であるためにも、大事なポイントだと思っています」

小さい町ゆえ学ぶ場や仕事は限られており、進学や就職で町を離れる若者は多いが、富田氏はエールを送る。

「私自身が広い世界に出て戻ってきましたから、若い世代の皆さんには、まずはそれぞれに自分のやりたいことを目指してほしいですね。そのうえで、故郷に対する思いを持ち続けてほしい。この先もいつか帰ってきたくなるような地域づくりに努め、数多くのチャレンジを繰り返します」

横瀬町では今日もどこかで誰かがあらたなチャレンジを思い、未来を切り開く人のつながりが生まれていることだろう。



左上／秩父地方には受け継がれてきた祭りが多数残る。毎年12月3日に開催される「秩父夜祭」は、日本三大曳山祭の一つに数えられ、ユネスコの無形文化遺産に登録された。

左下／横瀬の人々も秩父神社の氏子として御神幸行列に連なる。

右下／例年1月中旬～2月下旬開催の「あしがぼの氷柱」は、住民がボランティアでつくる氷の世界。幅200メートル、高さ30メートルの圧倒的な景色目当てに観光客が訪れる。

(写真提供：

左上／田端将伸 左下／近藤保子 右下／横瀬町観光協会)

